



へ13 特
3141
7

雙蝶記一名霧籬物語卷之五

江戸

山東庵 京傳編



①窓錢まどぜにのうき世をたかると主人まにんの合あは力ちから

扱あつかも南方みなみかた十字兵衛じゅうじべゑが兒子こども南餘兵衛みなみあまのべゑへ母はは真弓まゆみ一子ひとこ窓太郎まどたろう
りろとてふ。前の年まへとし鎌倉かまくらと啞方おぼろ松まつひよりて彼郷かのきょうと立退たちひき
身みとよむる陰かげぶふたれを。一所いしょ不住ふぢ小伶傳せうてん々々々々母ははいひこふ。
夫おとこ十字兵衛じゅうじべゑの不忠ふちゆうとやあふう人ひと小。自己おのれ及および以もつて非命ひめいと
死ししむひぬれた。冥途みやうとの苦患くわんもささぐし。おりのひやらるるあり。故ゆゑに
今いまころおりのひ立た西國さいこく順礼じゆんれいしてとらて夫おとこの罪障ざいしょうと消滅しょうめつし。仏ぶつ
果はたと得えふふよとふふもとありふたれと。我われ老おいて足弱あしじやくなれば遠國とんこくの

歩行あひのあひど。これといふせんと打敷うちり。南餘なんよ兵衛へいゑ元來げんらい孝こう
 心こころ深こほき者ものなれん。母ははの望のぞきを遂とちかんとおりひ。そのいふたがり立小
 めいふもしとかん供たりしべいといひて頼たりけがい少すくの貯たくわを
 出いして親おや子こ三さん人にん着きまさき禪衣ぜんい小せう笠かさ手て覆おほ裏うら脚あし乃すなはちひの
 旅たびの具ぐをとりてわらりしめ其支し度たとり。二に箇がの篋かとつり。
 前まへ小せう母ぼ後ご小せう子こと乗りしめ。櫛かみ擔かたを以てこれと荷長ながき旅路り出い立だ
 けり少すくの路ち銀ぎんもとりつひん尽つれる道ちをとり往來わうらいの旅たび人にん
 一いち錢せん二に錢せんの情なさけとて其その日ひくとおろりやさねされば南餘なんよ兵衛へいゑ
 うらひもうれぬ順礼れい歌かとううふおのづかり語曲ごきょくの節ふしのまたはるも
 理ことわりあり。母ははのいふる声こゑの齒はりてうらを感太た郎らうハ順礼れいといふ
 法はふ施しといふ舌といふぬかこの声いと哀といふまん乃乃なささ

幼子わらわの父ちち親おやは荷れたり。柄杓ひしやく打うちり片手かたて業わざは風車かままりして
 握にぎりして人毎ごとく涙と落しし。情なさけといふぬかこりき。かく物を
 乞こり行旅りなれる道もとりどろどろど。木きの实みとみらひて飢を
 ちの流ながれを掬くして渴かわをとりし。野原の露つゆ小袖せうそでと斤敷しんしき木き乃の
 下草したくさのいれ臥て夜を明とり。悲かなしき夏なつの数くはりひはく
 されぬ旅たびなれるも。伊い佐さの擁護ごやありし。恙あやしき日ひ数かずといふ
 秘ひて。三十二さんじふに箇が所ところの靈れい場じやうといふが。第三十三だいさんじふさん番ばん目め美濃みのの谷や
 汲くり到て満願げん。夫おとこより又都みやこの方かたへのりかるぬ。○俊成とんじやう卿きやう乃の
 歌うたのいふは代よ千ち代よといふはて八幡やぶた山やま君きみをまりしる人名なをいふ
 有ありしといふは詠よみせしるは八幡山やぶたやまへ京といふは去さりし四里餘よりのよりして
 山城國やましろのくにの南界なんがいなり。當時たうじ男山おとやま護國寺ごこくじの本尊ほんそん白檀びやくだんの薬師やくし伊い

因帳（いんちやう）わに（に）よりて参詣（さんぎ）の人群集（ひとぐんじふ）し。綿々（わたわた）終繹（しゆい）とて往來（かうらい）を
 らも絶（たふ）といと賑（にぎ）多（た）あて。是（こゝ）ふ京（きやう）とて利（り）と得人（とくじん）と多（た）ふ者（もの）此（こゝ）地（ち）
 彼所（かゝる）ふ假家（かりや）とつり。酒肴（しゆげん）樽（たん）可（か）漏（ろう）子（し）と商家（かゝる）あり。沙餠（さへい）饅頭（まんとう）
 齋饅頭（さいまんとう）餅菓子（もちかゝり）と賣家（うりや）あり。心太（こゝろ）賣（う）の店（みせ）水機（みづき）関（せき）小巧（せうせう）を尽（つく）。
 花賣（はなう）の軒（のき）ふ青柳（あやなぎ）の糸（いと）とびくも。山崎（やまざき）の小櫃（せうび）の繪（ゑ）と深草（ふかぐさ）焼（や）
 の彩色（しさい）ふけあされ。糰餅（だんぺい）の螺（ら）の形（かたち）も編笠（あまがさ）焼（や）に像（ざう）と奪（うば）る賣（う）ト（ト）
 著（あ）目（め）と捨（す）藥（やく）賣（う）の長劍（ちやうけん）と撫（な）と。宇多（うた）天皇（てんかう）ふ十代（じゆだい）の後胤（こういん）伊東（いとう）
 嫡子（ちやくし）とつり曲弄（まがまが）女（に）われた。螢（あゐ）の燒（やく）藻（そう）の夕煙（ゆふけ）とつり琵琶（ひば）法師（はふし）
 あり。福廣（ふくくわう）聖（せい）の辻談議（つじだんぎ）妙（めう）高尼（かうに）の針（はり）伏（ふ）養（やう）鐘（かね）鑄（ちゆう）乃（なり）勸進（こんしん）
 高足（かうそく）駄（だ）の行者（かうぎやう）綾織（あやおり）ハ（ハ）リ（リ）鉦（かね）の（の）とびくも。奇妙（めうめう）の術（じゆつ）を施（せ）者（もの）の更（さら）り。
 立（た）了（りやう）。幻戲（まじまじ）。刀（たう）王（おう）。綠竿（りよく）の（の）とびくも。奇妙（めうめう）の術（じゆつ）を施（せ）者（もの）の更（さら）り。

一寸（いっしゆん）法師（はふし）の蟾蜍（かき）舞（ま）輕業（けいごう）の骨（ほね）あり。骨（ほね）あり。伊勢（いせ）園（えん）より活（い）捕（と）て
 わて来（き）つ。鬼（おに）女（に）親（おや）の因果（いんぐわ）の子（こ）小報（せう）つ。蟹（かに）満（まん）寺（てら）の（の）女（に）孫（まご）乃（なり）
 俳優（あひう）犬（いぬ）の籠（かご）脱（だつ）頼政（らいせい）射（や）て落（お）し。鶴（つる）廣（くわう）有（あ）が箭（や）前（まへ）よかけつる
 怪鳥（かいちゆう）の（の）とびくも。更（さら）に奇（めう）とせむ。若狭（わがさ）の八百（やうはち）比丘（ひしよ）尼（に）が掌（てのひら）浅（あ）し。修（しゆ）
 人（ひと）真（ま）朝（あ）比（ひ）奈（な）の三郎（さんらう）捕（と）へ来（き）つ。焰魔（えんま）鳥（とり）など。見（み）てもあつたをぬ
 鳥獸（ちゆうぶつ）守（まも）つて之（これ）ぬ時（とき）人（ひと）あやしとあやきりの水（みづ）をさる。假家（かりや）あやせたりて
 立（た）ちびて。縹（あざ）の幟（しゆ）哥（か）交（かう）の幕（まくら）片（かた）くくとて風（かぜ）よひる。楊（やう）弓（きう）の音（ね）
 辻打（つじうち）の大鼓（たいこ）ふまはる。唄（うた）の笛（ふえ）くまひとくまきとえて。諸人（しよじん）の耳目（じやくもく）とて
 ろうむ。あつたをさる。薦（せん）簾（せん）掛（か）假家（かりや）つらて。外（と）の方（かた）も怪（あや）き獸（けもの）乃（なり）形（かたち）を
 まづまづ。招牌（しやうひら）とひび出（い）し。片（かた）層（そう）ぬき。男（おとこ）戸（と）口（くち）不（ふ）立（た）。聲（こゑ）を
 ひききて往來（かうらい）の人（ひと）とつりまはる。声（こゑ）をさる。男（おとこ）戸（と）口（くち）不（ふ）立（た）。

招牌とていふ。それもこれの雷獣といふものぞ。雷小つまでありく歎き。これへ安房国二山の雷狩小活捕得たり。これ見ふ家土産小。話柄を招牌小露をりもつらつらわすを銭取のまじりめひて後おこし声の群て。假家の裏小入らおーあらおーのめさあひぬ。蜂のどくよ群て。假家の裏小入らおーあらおーのめさあひぬ。かくて日も西ふくよきまれを。黍詣の諸人足とるめりておのぐさまじく家路と急ぎて飯去る。忽寂寞とて跡は残る物。早氏の皮の蜘蛛の形をる。魚の骨の野ざりめさる。懐紙乃屑纏の塵破ける。鷹のうひのまら。前程より彼假家乃やろ小物を居る。勧進聖あつろ小人をれとんを彼方とさ。招きまれを笠ふく着る。煎小物賣荷と擔てろみ来さ。彼

観進聖頭髮とびり頭巾とれは是乃箕腹蟻右衛門なり。煎物賣笠とれは是乃袴田紺九郎なり。さて蟻右衛門四辺と見え声とひそめてつる。おのれ鎌倉より貯来る路用の金と五条坂少つらひ果し。おのれゆげを俄小浪の身とつる。他國立退べき路銀をさへもなげをゆきと捨し。物をとつる。目とかるかりとつる。紺九郎つる。おのれと左の如く貯かたゆふ。煎小物賣とつる。さへよふ。かくて隠謀とつる。又かの蛇小谷の老女今まらぐの所小住。且路用の金と得良計と施して彼所小去老女にまらひて宿望と遂ふ。二人語居る。越小蛭右衛門が奴僕沙土七いそぐ来り。二人よびひてつる。去来五条坂。再會の所もろくとのまらひ。

彼所ありて。数月待化。之と音信。ふとあつた。さうか。やむ。ふ
 得ど。ふとあつた。のりて。所くと徘徊。おん両所の。行方と。ふと
 化ひ。他の。こゝろ。おきて。且と。きき。えあぐ。ま。山咲庄司。頃。日上。京
 まで。おん。両処と。捕へん。と。あつた。おん。ふと。あつた。油。新。あつた。
 おん。右衛門。これ。を。聞て。打。驚。あつた。此地。おん。長居。い。ふ。ん
 と。おん。當惑。の。体。あつた。紺。九郎。い。ふ。ん。庄司。京都。おん。逗留。て。居。つ。と
 ち。我。く。西人。不意。と。あつた。おん。打。と。あつた。おん。右衛門。頭。と
 少。て。つ。つ。い。ふ。く。彼。無。双。劍。術。の。達人。あつた。容。易。おん。手。と。あつた。
 余。吾。郎。狂。氣。と。此。辺。と。狂。り。き。つ。つ。庄司。と。打。お。い。わ。わ。ん。と
 彼。も。打。お。生。お。き。ひ。て。狂。人。と。い。ふ。後。日。の。害。ら。う。と。い。ふ。と。い。ふ。と。

いひ。と。あつた。い。ふ。い。ふ。池。有。よし。童。等。の。い。ふ。と。聲。聞。え
 くれ。と。沙。土。七。彼。所。と。顧。て。おん。正。しく。餘。吾。郎。おん。い。ふ。と。あつた。
 右。衛。門。い。ふ。と。あつた。油。面。と。あつた。暗。おん。彼。と。打。捨。よ。い。ふ。と。あつた。
 つ。き。て。耳。語。くれ。を。沙。土。七。の。打。う。か。づ。く。蟻。右。衛。門。の。紺。九郎。を
 と。も。おん。い。ふ。と。あつた。此。処。と。立。去。ぬ。沙。土。七。の。願。う。と。あつた。と。面。と。あつた。裾
 端。折。て。帯。お。高。く。い。ふ。と。あつた。刀。の。目。釘。と。い。ふ。と。あつた。假。家。の。陰。と
 身。と。あつた。待。居。よ。い。ふ。と。あつた。餘。吾。郎。の。堂。左。衛。門。の。善。心。おん。あつた。て。腹
 き。り。と。あつた。露。あ。つ。と。あつた。彼。の。行。方。と。あつた。い。ふ。と。あつた。狂。人。と。あつた。髪。振
 乱。し。竹。の。枝。と。打。お。い。ふ。と。あつた。足。も。と。あつた。狂。ひ。來。る。後。おん。い。ふ。と。あつた。童。等
 づ。ぐ。い。言。置。て。打。笑。へ。立。留。り。童。等。何。笑。ふ。物。狂。が。おん。い。ふ。と。あつた。
 て。あ。か。春。は。と。あつた。花。と。あつた。菜。種。の。因。と。蝶。と。あつた。菜。種。の。蝶。の。果。と

又虫記卷之五

あつに藻に住喪のそれくると。狂ふ袂の風の葉此。乱して露のおきも
 せど。寐もせむむと夢心と。うつろはれとひてはつ突ひら伏まうらぶ。
 童どりの立去て折しとやるひん。沙土七の物陰よりあつれ出て。
 唯一打と斬くれを。餘吾郎いむと起てあつらひ。園やわかういの
 空の風ふも。松の音もあつらひわらうとあつらひ。扇とあつらひ。又きり
 つら。灰拂ひのけ。真葛が原の露の世。身とくくくやあつれんと。
 のひくわらふ扇乃手練こまはけもまもあつて。秘術とつくせど
 手あつらひ。頭とのぞく身と流ゆ。裾と松の根上る。ひくめく劍の
 雲の電光餘吾郎が身のくくく。波上の燕子小異あつらひ。狂ひ
 わらひけり。二の所とく度も。あつてん飯をくく。又行雲の
 旗手より。折しとあつらひ。青の梢木の葉もくく。淀の川音

さうらひ。雲の端袖もひくく。あつらひ。あつらひ。狂ふ走ら
 不狂人も打りくく。早足と出し。わらふあつらひ。追去ぬ。○時ハ
 五月の半なれど。送梅雨も降どくく。て。天氣快晴なれど。
 此日ハ夕方より雨と催を雲起まれど。道行人も家路を急往来
 絶する八幡堤。編笠深く着る。武士一僕具し。歩も来り。辻よ
 立ち。石地藏の陰に立ち。あつらひ。僕とらく。何あつらひ。耳語
 くれ。僕の手とあつらひ。操る。あつらひ。如く今朝かどく。あつらひ。
 かの武士のよりく。あつらひ。打うら。又何や。あつらひ。耳小つ。あつらひ。耳語
 懐より金財布と取出して。あつらひ。僕にこれと受取て。あつらひ。
 うあつらひ。かの武士の来り。道へ飯を。あつらひ。あつらひ。あつらひ。
 金財布と掌ふのせ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。あつらひ。石尾とあつらひ。

金のありは別ある物ぞ。五十兩と云ふ金と云ふ人の我はわづけ
 りふも。我正直と云ふるも。人の日来が大支なり。無益
 と云ふ。咳折し。沙土七ハ餘吾郎と見失ひ。そのまかり。乃
 らぬ。目と云ふ。此処を尋来し。かのまかり。独言と云ふ。
 て暗は喜び。箱村の陰に立る。さな様子と窺とり。暮六の鐘
 鳴くと耳に近く響き。これのまかり。財布と懐は
 入て足もや。お走去んと云ふ。此沙土七はと出て。やうな立ふと
 ぐら。あふ。いと。彼も。懐は手と。入財布と。掴て引出。彼
 も。ハ沙土七が腕と。と。財布と。取。盗人。
 我命より猶大。此財布。汝。一打
 と。其。退て通。一腰の柄。手と。臂と。

と。下。罵。沙土七ハ盧胡毒蛇の見。其財布。は。は。
 と。又財布と奪取。逃去。足。引戻。取。
 拾。沙土七が一身の貪欲。手頭。凝。打。擲。
 財布と放。互。脱。合。或。倒。起。
 重。下。敷。息。力。探。合。
 ありけ。時男山の見。物師等。錢箱。木。大鼓。噴。の。
 見。物。具。携。飯。道。丸。木。と。つ。の。裏。彼。雷。歎。
 と。荷。来。名。黄。音。の。の。聞。き。裏。組。つ。
 や。争。此。方。の。二。人。又。撲。地。つ。此。方。の。二。人。暗。き。裏。
 見。物。師。等。と。小。相。人。と。或。の。踏。倒。踏。倒。
 見。物。師。等。の。狼。藉。者。酔。狂。人。よ。ひ。て。睨。ま。

ぬけり。潜つ。身と避。彼僕。いそへ。したうらふ。見。物師等。を
 盗人の加勢。ある。と。なり。や。おの。ひ。よ。て。一。腰。と。抜。放。して。打。振。ける。
 其。刀。の。光。と。暗。裏。み。ひ。ら。ま。ま。れ。バ。見。世。物。師。等。は。これ。を。と。ん。と。く
 膽。と。消。雷。獸。の。圍。と。其。終。地。上。に。捨。置。て。そ。れ。去。る。沙。土。と。も
 刀。と。抜。又。さ。死。も。ま。ら。の。探。了。打。空。み。ひ。ら。く。電。の。光。と。も。と。ん。と。く
 打。こ。む。刀。丁。と。も。と。打。合。し。勝。負。つ。れ。た。刀。と。投。捨。さ。不。財。布。と
 引。合。て。取。つ。と。も。争。時。も。電。光。の。そ。ら。へ。く。ひ。ら。き。て。雷。聲
 虺。と。鳴。出。し。多。る。彼。雷。獸。雷。氣。に。り。あ。り。て。忽。勢。極。く。あり。
 繫。る。鉄。の。鏢。と。ひ。ら。ま。ら。つ。さ。も。堅。固。に。つ。く。丸。木。の。圍。と
 や。り。く。と。押。破。了。て。躍。出。総。身。の。毛。と。逆。立。鬼。と。吹。け。り。牙。を
 咬。き。し。眼。中。より。光。と。放。て。狂。ひ。ゆ。り。ま。れ。バ。二。人。の。者。は。大。に。驚。き

身と避つ。不財布とあ。さ。さ。ら。不。財。布。の。紐。雷。獸。の。首。み。ひ。ら
 掛。り。を。二。人。の。者。へ。これ。と。も。め。と。お。さ。る。く。追。ゆ。り。多。る。時。雷。聲
 漸。く。近。く。鳴。て。空。より。一。ひ。の。黧。雲。ま。ひ。ら。り。益。暗。く。あり。て
 あ。や。め。も。さ。さ。ら。り。し。雷。獸。へ。此。雲。み。飛。上。る。首。み。財。布。と。ひ。ら。掛
 け。り。矢。と。射。る。如。く。に。天。上。し。て。多。る。の。僕。も。沙。土。と。も。電。の
 光。み。就。て。空。と。見。わ。げ。これ。と。も。さ。さ。ら。り。て。追。ゆ。ん。み。も。翼。を。ま。れ。バ。見
 せ。唯。惘。然。と。して。立。居。り。し。二。人。一。度。み。尻。居。み。倒。れ。て
 大。息。つ。き。て。居。り。し。夫。孝。の。百。行。の。先。の。孝。天。み。至。る。則。ハ
 風。雨。時。は。順。ひ。五。日。又。風。吹。十。日。雨。降。孝。地。又。至。る。則。ハ。万。物。化
 盛。し。草。木。も。よ。く。花。咲。實。の。り。五。穀。豊。饒。の。り。孝。人。み。至。る。則。ハ。其
 家。み。衆。福。来。り。て。貧。人。も。忽。福。者。と。なる。古。今。其。例。も。さ。ら。り。し。て



又此言卷之五

されを悻行の徳の尊きこととてなき物也。孝なる人の天の憐れ
 かうちていふとき福とつけしめらる。孝なる人の天の憎とつけし
 おそらしは災ふあふと影と郷音の如し。原孝の字とつる老の
 字のくえと省て子の字と添し。是老なる父母の傍ふ子ありて
 よく仕ふ人孝とよむの謂なり。老なる父母よりらる人此字の形日
 うらむんばあふく去程ふ南餘兵衛ハ西國順礼とあり終て
 母の願望と遠し。それより山城國小到了。狐川と左ふより河内へ
 越。抜道の村末ふ人の住ありする古家と借母子三人あるく
 此小月日とおふぬ其家のさまハ二階づらりて奥の間もあふと
 軒端くぐさ壁くぐさ骨わらふらふらあり。窓ハ蘿葛
 ともひまとい庭ハ葎生茂。板敷も朽。簀子も破床の下より

草生出かどしそりふせさはいんし。素一銭の貯とくあり。ま
 活業もかたし。童の翫物ふらふいらく。の笛牧童の横笛。盲法師ハ
 一節截喇ハ噴吹。笙の笛のくぐさ。手細工つらてくれ。賣わらふ。
 鹿笛ふらひ。秋とわりの。鶯笛ふらび。春とび久。くぐる。價と
 取て母と養ひ子と育れ。夜の衣薄く。曉の霜冷。朝
 氣の烟絶。くそつ孫ふ飢。びらかり。素孝心深き。のれ。父十字
 兵衛が非命。不死。と今ハ悲。鳥辺野の華野。あま。詣て是。と
 祭ること。懇。母へいらく。の辛。昔のつり。るゆ。や。註。と。な。と
 大声。よ。い。ま。と。餘。兵衛。へ。これ。と。歎。き。ま。ま。と。孝。順。ふ。つ。て。と
 のら。る。更。切。り。貪。ま。あ。ふ。も。母。の。味。う。た。食。と。こ。め。お。の。れ。と。子。の。食。と
 と。食。ふ。あ。る。も。ち。足。ざ。る。と。れ。お。の。れ。ハ。飢。と。も。の。ひ。て。食。せ。る。日。も。あ。

るなり。されど母が食しきと見せて其心と安しし。ひのちき
銭の時ハ魚肉あり味の餅菓子のしと求て母より其
喜の色と見てよめり。子の空太郎ハいまだ五歳にすぎぬ。
共これと食めしみて泣く。餘兵衛呵らして食しき。母の十分
小食と多食をいひぬ。おのれの常小襪褌のしと着て母ハ余を
あつして臥しぬ。が寒しん夏とありひて母の熟睡しぬ。おのれ
一重と脱てこれとあり。母睡と醒して餘兵衛が臥し方とんち。
彼が薄着とあり。我も着る。彼襪褌と又餘兵衛ハおのれ孫ハ
おのれ抱き余とあり。孫小着ておのれの寒さといし。餘兵衛目
醒ると又一重と母ハゆづ。一夜のちハ親子一重の襪褌とあり
あふこも度々あり。母の慈し子の孝とあしむ。ひのち是寺へ入て

此前のゆをり。ひて五月のちふ至アタダ。餘兵衛益困窮
て。米屋薪屋古手屋など債おろいで。彼輩夫とまひり。とあり
まれば。さむぐ。詞とつて云延母ハもまきし。と心とつひぬ。餘兵衛
熟かりひる。頃日母の容体とカる。瘦しけ日にまきり。衰とあり。小
様子あり。我貧中にも母ハ折く。魚肉とあり。食のしき。さる
様ハ心とつひる。もさる。漸々小衰あり。さし。さき。試とハ
あふく。だ。とあり。一日あさけき。魚とあり。あて手づ。叮嚀と調
わ。さ。飯と煮て。おの魚肉とそえ。母の前ハそえ。拙者ハ物
賣ハ出ぬ。た。ゆ。う。ふ。これとあり。あがり。ひ。く。とあり。さ。指とあり
掌ハ昏て。り。な。れ。た。母ハいし。衰。る。ま。ぬ。ま。そ。う。ち。點頭ぬ。餘兵衛ハ直
商ハ出ぬ。体とあり。立出家の傍ハ竹林のちハふ。か。れ。入。て。重。の

又世宗...

...

様子どらわひ居す。母へくわくく露も尻孫の窓太郎と側近
 よせてのやう。いつもの如く汝此奥と食せよ父の飯らさうらふし
 とつひつ箸と把て彼奥の肉とむら。咽ふ骨とたつらなとつひて食め
 くれ。窓太郎いとうきりけふ舌打して食ふ真弓の其りきりきり
 胸さうらふら。あざりあて候の目とむらわか不便や。餘兵衛我
 孝うゆ多ふいしき子の食と減して我への食と飽しむ故ふ汝
 飢からん僅の奥肉と食しむも。餓鬼ふ百味の飲食とよき様ふ我
 争是と独食はるるのふ。若父が飯てしむ奥の此祖母がのこり食ぬ
 又必汝が食しとさうらふら。皆窓太郎に食しあかぬ。一箸ふ食と
 荒屋の登も豹のむらゆるさうらふら。ひに團扇と把て窓太郎と
 中ぎかりぬ。餘兵衛の壁のふらさうら。所より暗み此体と見て落涙しむ。

母人孫と深くいつしとあひ。我まわりの食と我家のあつさる時
 皆窓太郎に与へあひ。さうらふら。飢とあつびて食しあつさるる。日
 まさうて瘦衰あつさる。且驚且歎々々。黄昏乃
 比とさう。雲の間より電光のらさうら。遠く雷乃声ひびたや。雨
 降来づくさうら。竹林の裏と出外の方より飯を来り
 体となりて裏ふ入母の前ふらさうら。今日も錢かき得て飯
 これとらんあつさうら。仕らさうら。懐より錢の代衣と把出しそ
 見をくれ。母のむら。けりひし。飯のやあし。ぞ前程の奥の
 よりもや。美味ふて。おがえ。食と過世あり。我今日へ何ふまは
 いま。青経とさうら。我これとさうら。汝のむら。休息せよと云て
 念珠と袖らさうら。灯火と把て奥の一間ふらさうら。餘兵衛の

門首の戸を引よ。引窓の戸を立なぐりて雨の降べき用意となし。
 方灯と取出して火打の石火電光も壁の破れと漏風も硫黄乃
 花と消れりと心の闇の袖屏風寒冷させりと子と親乃心を
 あけぬ子のまろび寐ある窓太郎飽てやとやくとこちよけお
 睡つ。餘兵衛の独手と又きて心の裏みかりひまの母人孫といふ
 志その切なるゆゑおん身の衰と顧ありど。やて目と過りあり餘死
 あつらん支配定まり。高禄とありり昔の身あつらん。いづれとふも
 孝養と尽とべきにあらんと。母人の心やゆゑ窓太郎と養ふ
 小も。糧不足あらばせんといふ。唐土の孝子へ親と養ふ其といふ。
 子と埋りんとしたるもあり。我運命尽どり。天日の光ととる
 ことありて。やてび妻妾と娶ハ子ハ又と得らるべし。母ハ再得り

あつらんれ心。寧窓太郎と失りて一口と減り。且母の錠と去絆と
 とふあつらん。子と捨るハ世の制禁されど。今夜
 ひとふ刺殺し。母ハ他ハあつらん。母ハつて當をとり
 べし。心と壁ハ掛あつらん。刀と把て立ひひる。くんとあつらん
 窓太郎。寐顔の愛ら。小氣あつらん。あつらん。あつらん。あつらん。
 刀と立べし。あつらん。目と心もあつらん。前後不覚。位
 伏ぬ。折し。奥ハ母真弓。看聲の声鉦の音も。細火陰又焼。陰
 蚊遣の烟も鳥部野のびり。き空と見る端。くもひつてひせりて。
 ちと。歎ふ沈し。あつらん。あつらん。あつらん。あつらん。あつらん。
 刀と抜ん。あつらん。あつらん。あつらん。あつらん。あつらん。
 壁ハ掛あつらん。時窓太郎。守と入。中著ハ迷子の札と。あつらん。付

又世宗記卷之五

打鉄おき一が其紐刀の鏡ふまゝのうき。留まりて抜ざるあり。
 餘兵衛くれとろくくそ。又氣とくくたしとわれ。應々と鳴神
 ののびたも遙遠里に。迷子とよぶ鉦大鼓いしと哀とそんふけり。
 嗚呼人の親の心ハ箇といふほどして子とよめ者もあり。宿世乃
 わき因果こそ。負身やうりさげれど。子火怪我ぶふまはと。これ
 此とく守中著つけきと。親の手ぬり殺と子ぬ。劍難除へ何るぞ。
 冥途小迷いも幼子の迷子札も無益あり。幼て死と者ハ罪科とわ
 まどとそんも。父母養育の大恩と。か々を親ぬ先立ゆ名不孝の罪
 の重しとく。定業よとさありといふ。況又ぬけられて。非業小死ハ
 窓太郎佐比河原小迷ひ去砂と集て塔と積まむか呵責ぬ苦まらん。
 我ハ一生負くと。彼とく生立て。老後の力亡後ハ親の棺を昇

さりともひひふて育一子と。我手ぬりて身と屠いづれ。流ハ順
 水とさうまの手向べ一とみかひひき。親子ハ一世の縁と聞ハり
 来世でも逢れぬ我子永劫顔の見かきと。寐顔とつとく打まり。
 恩愛深き悲と身と刺とかりひて。落と涙ハ五月雨の空見よ
 わる如くあり。餘兵衛ハ元来大夫とて男魂失つる者もれども。
 かく女とて線言つた。子とみかひ心の切なるゆ名と。更ハ哀深
 あり。奥の間ハ母真弓。聲のけりさへ。この物音敷もろ。氏
 看經の鉦打おき。心の裏ハかりひるハ。餘兵衛錢袋ハ小石を
 入折く我ふんせて。我ろろとやとかり。む。とくよとこま
 悟れども。さあぬと。きふと。我ハ彼ハ心と安と。ひん
 かりあり。彼がわりさぬと。貧苦小い。瘦衰て年若くハ

又此言者之三

といふ氣力もなほどく。余もあきらげきり。まゝのまゝとて孫まをて飢
 がらるればよく育へうもおびえざり。此母が身ハ年老て残る雪の
 日影待間の命をれば。何れかひびき。我一口と減ト彼が絆と断て
 辛苦とんがき。生きたる子や孫の命にうり。冥途に到て十三年
 兵衛ぶく死路とよぶ。落むりも苦患とてひまゆきふふふ
 べうと覺悟とさる。うめて亡後の経帷子小とおきあきさる
 禪衣と取出し。剃刀ととも小推乃て。餘兵衛不知られト曉られト
 拔足とるも聲のものが耳小の聞え糸と外へいり。箕子乃之折り
 降来る大雨の音もまだれて恐びて。彼方の二階小のがりゆきね
 かる時一も笠の下小覆面。蓑打著るも一個の武士此家よ
 近く歩に來る其跡より顯るうら面とくく。曲者刀と拔をぶらて

着來ま。この武士とて毆打おせんとかりふまぬるが電光石火身と
 隠し。暗くすれば又わられ出て打んと移るひ隠つ出つ方くまはれも
 かの武士はこれと知る様子こそいしあやうくをええふる。餘兵衛ハ
 泣沈て居りしが。母の看經の声やまれば。見つけられては妨げと
 かりひつ。やがて心と取りし。畢竟母の身がらり小殺と子られが難
 べき責にわらばとかりひまり。恩愛の絆とるし守中著の紐とひん
 きり。刀ととりりと拔放して。やじく刺殺さんとある時。虫がまらる窓ハ
 太郎。あややと寤て目と醒し。起上アそ位出。婆々まぬいづおれを
 婆々まぬと寐々まぬ。波々まぬのうとさけびて。奥の方へうんとま
 と心つうも引戻し。かりひまきとかりあぞ。位さけが子と引をて。
 手拭とりて目口とまきだ。引窓の繩とよりよきて腰小結付放打ふと

おりひしが。猿者よとふれ。猿の子繫一如くして目もわてしぬ姿
 あり。わさかりひやそらげ腰小結つけし。菩提のよめ小讀誦する経
 卷の紐ともり。南無阿弥陀仏とこそ入つ。振上る刀の下まきる子の
 其姿に北音盲又異々うきんを。平日の遊びとかりひ出し。鬼は
 の鬼よりもあかおそらし。我仕業と。かりは又も刀の手さたさる
 多。彼方の二階の暗裏より母真弓。禪衣と羽小かりひ。口より念仏手
 小の念珠。剃刀と把上て。吭とまうんとわあてより。此方の餘兵衛も
 かりひまり。南無阿弥陀仏といふ声りらと。又振上る刀乃ひうを。
 わりやとひらり。電の目と射るなり。家内と照し。忽一声霹靂
 崩裂とくりに鳴響音で頭の上小落る。とかりひをうりふさる。ひ
 餘兵衛が刀の手の裏もわがえどくひて。窓太郎が身小ひ

